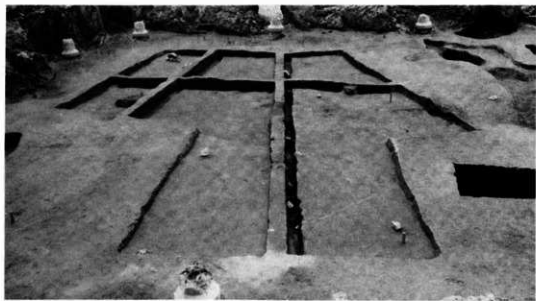




第1号(右側)・第2号(左側)第3号(上)竪穴状遺跡



(北側より)



井戸址1（右側）井戸址2（左側）



井戸址3



土坑43



北側より

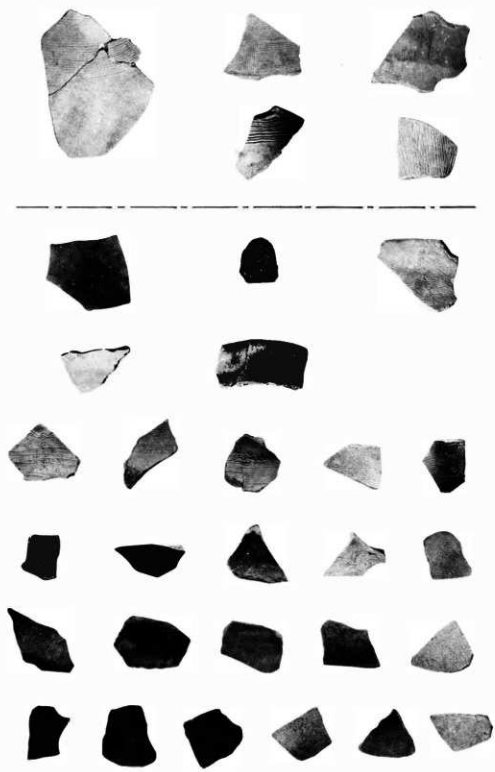


西側より



第二五圖版 第一七号住居址・井戸址三出土土器

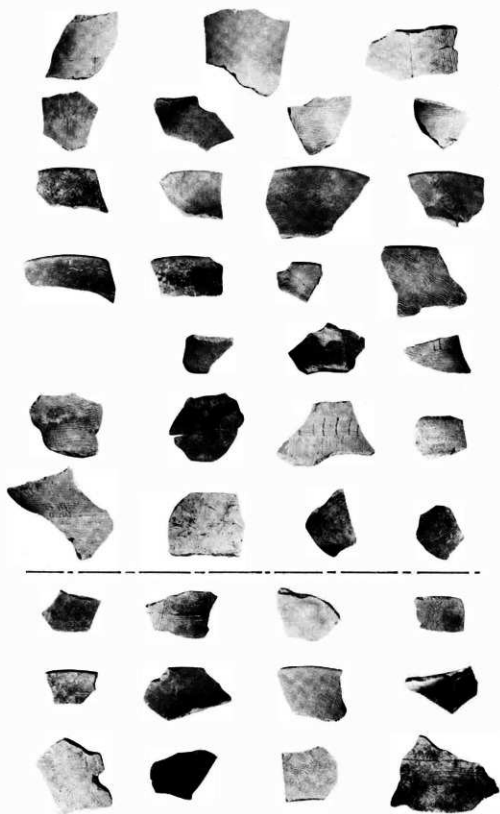




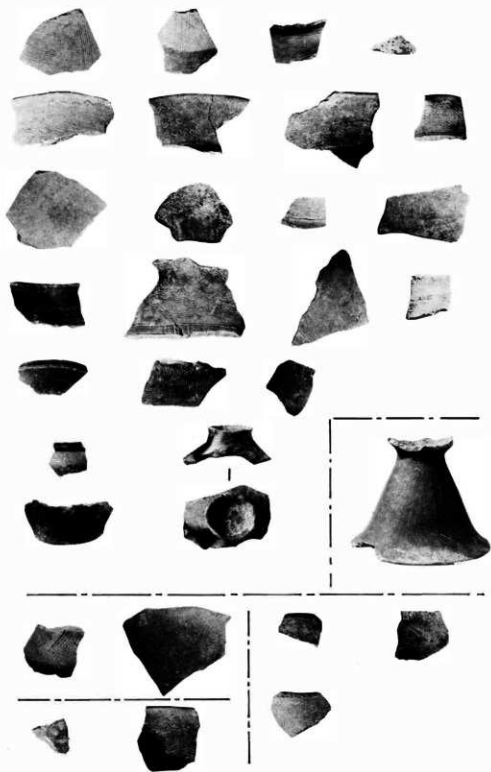
第二七圖版 第一・二号豎穴状遺構出土土器



第二八圖版 第一・三號豎六狀遺構出土土器

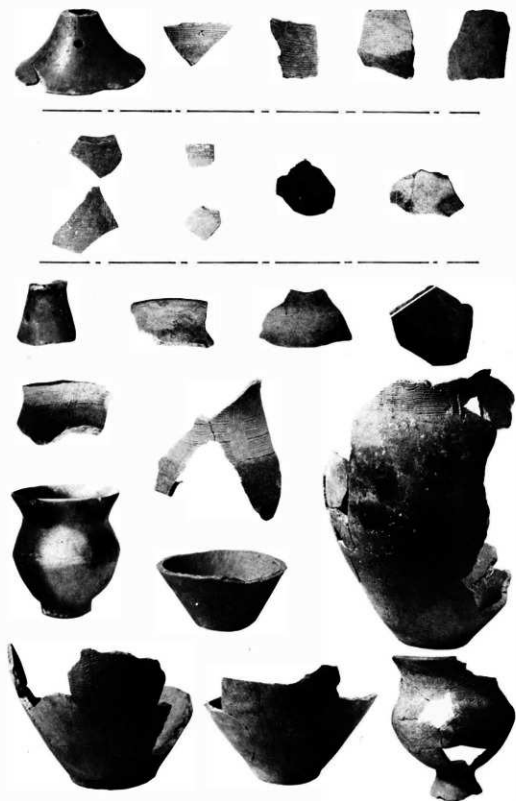


第二九四版 建物址・土城二・四〇、四一出土土器



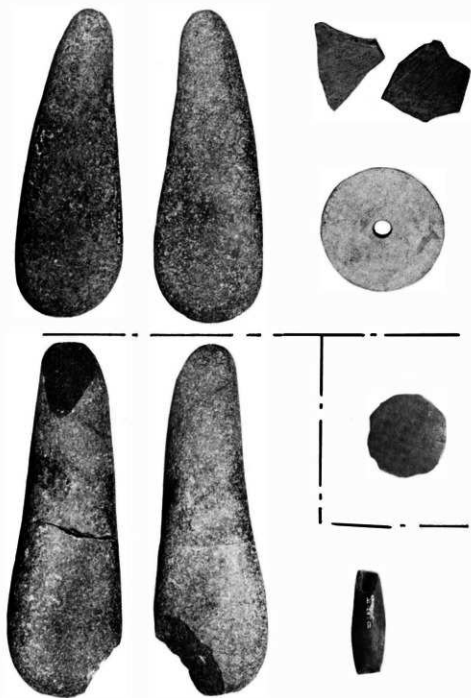


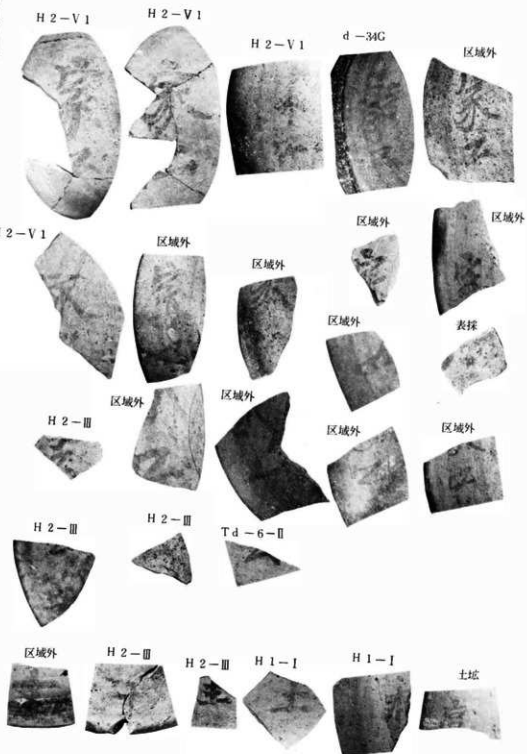
第三一圖版
IV・Vトレンチ・グリット出土土器





第三圖版 第一七号住居址・第二・三号竪穴状遺構出土遺物





第三五図版 住居址分布状態



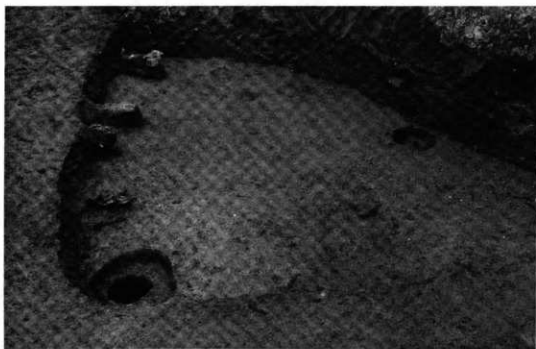
北東より



東より



北西より



第18号住居址



第20号住居址



(上) 第21号住居址



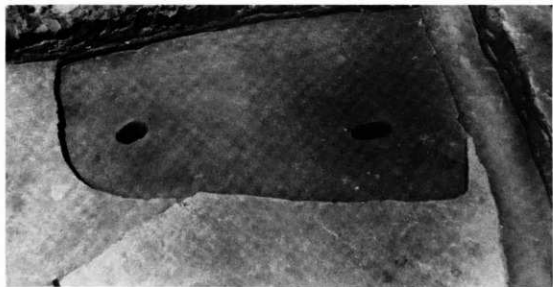
(右) 埴輪出土状態



第22・23号・33号住居址



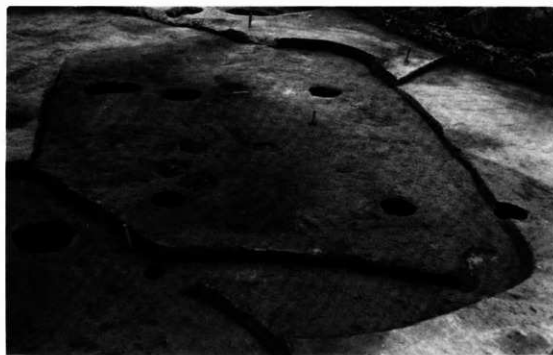
第24号住居址



第25号住居址



第26号住居址炉



第27号住居址



(上) 第28号住居址



(右) 同土器出土状態



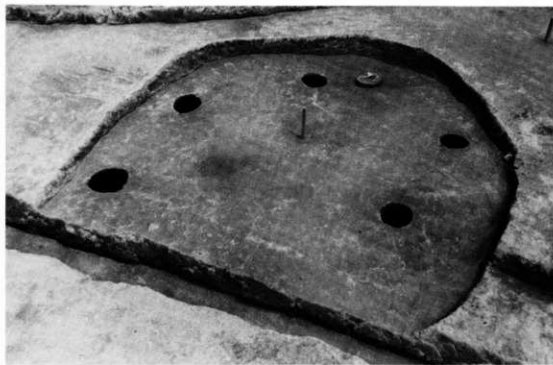
(中) 第30号住居址

(下) 同土器出土状態





第31号住居址



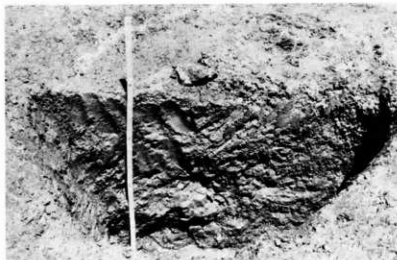
第32号住居址



土塚墓二丁四

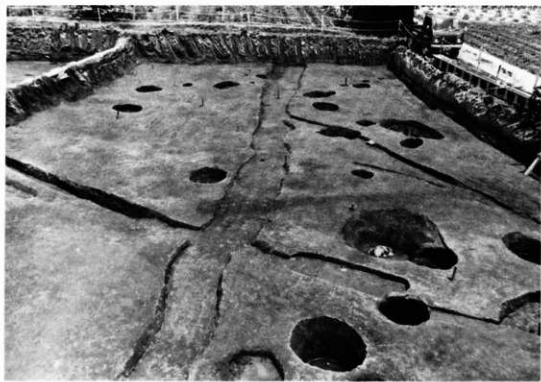


土塚五六

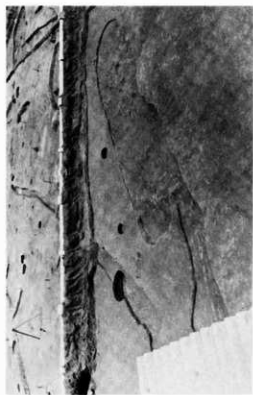


土塚七一

第四三圖版 土城群・溝址



第四四图版 土城群·沟址



第四五图版 第一八·二一·二二·二四号住居址出土土器



第四六圖版 第二五・二七・二八号住居址出土土器



第四七圖版 三〇号住居址出土土器





第四九圖版 包含層出土土器



第五〇図版 土埴五八・その他出土石製品





旧プールお別れ式



調査



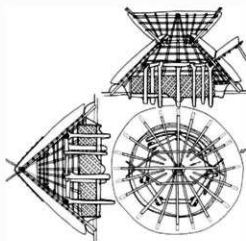
人骨のとり上



調査

德 間 遺 跡

——德間小学校新設地点遺跡発掘調査報告——



第1号住居址家屋復元図

第1号住居址家屋復元図

設計者 森嶋 稔

(調査団長・千歳川水系
古代文化研究所主幹)

今回の調査で検出された第1号住居址をもとに、住居址内排土量及び小屋組の比率を古代絵画・家屋環頭柄頭等に求め設計したものである。この復元家屋は実大の80%の規模で市立博物館に復元展示が予定されている。

例 言

- 1 本書は徳間地籍における新設徳間小学校建設予定地内の埋蔵文化財包蔵の有無を調査した分布調査、それに基づく本調査の緊急発掘調査の報告書である。
- 2 この調査は長野市・長野市教育委員会と長野市遺跡調査会との契約に基づいたものであり、事務処理は長野市教育委員会が、現場における業務は長野市遺跡調査会が担当実施した。
- 3 本書は調査の性格から、それにより検出された遺構・遺物を主に提示することを主眼においた。尚遺物の計測等の詳細については、本文末に表にして記した。
- 4 遺構図は、調査員全員があたり、主として青木(和)が整図・再修正した。
- 5 遺物の復元等の作業は青木(和)が中心となり、各調査員がこれに協力し、図化・整理にあたっては青木(和)・小林(秀)が行なった。
- 5 土器の拓影は青木(和)が行なった。
- 6 各章・節・目の執筆は、第1章を事務局が第2章を矢口が、第3章を調査員の記録と助言のもとに青木(和)・小林が、第4章を矢口が担当し、その責は矢口にある。
- 7 出土図示土器一覧表は、弥生時代土器を青木(和)が、他を直井が担当して表化した。
- 8 遺物や調査によって得た諸記録は、個人記録を除いて、長野市教育委員会にて保管している。
- 9 本書の編集・印刷関係の業務は長野市教育委員会が担当した。

本文目次

例 言

第1章 発掘調査の経過	1
第1節 発掘調査に至る経過	1
第2節 調査日誌	3
第3節 調査会（団）の編成	5
第2章 遺跡周辺の環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	9
第3章 遺構と遺物	10
第1節 住居址	10
1 第1号住居址	10
2 第2号住居址	16
3 第3号住居址	19
第2節 土城	21
1 土城1	21
2 土城2	21
3 土城3	22
4 土城4	22
5 土城5	23
6 土城6	23
第3節 溝址	23
1 溝址1	23
2 溝址2	23
3 溝址3	23
第4節 その他の遺構・遺物	24
第4章 結 語	27

挿 図 目 次

第1図	分布調査遺構推定図	2
第2図	土層断面図	3
第3図	遺構分布図	4
第4図	地形図及び調査地	7
第5図	調査地周辺の主要遺跡分布図	8
第6図	第1号住居址、土塚3、溝址1 遺構実測図	10
第7図	第1号住居址土器実測図(1)	12
第8図	第1号住居址土器実測図(2)	13
第9図	第1号住居址土器拓影(1)	14
第10図	第1号住居址土器拓影(2)	15
第11図	第1号住居址土製品・鉄製品・石器実測図	16
第12図	第2号住居址遺構実測図	17
第13図	第2号住居址土器実測図	18
第14図	第2号住居址土器拓影	19
第15図	第3号住居址、土塚5、溝址3 遺構実測図	20
第16図	第3号住居址遺物拓影・土器実測図	21
第17図	土塚1 土器実測図	21
第18図	土塚1・2 遺構実測図	22
第19図	土塚4 遺構実測図	22
第20図	土塚4 土器拓影	22
第21図	土塚6、溝址3 遺構実測図	23
第22図	溝址2 遺構実測図	24
第23図	遺構外出土土器実測図(1)	25
第24図	遺構外出土土器拓影	25
第25図	遺構外出土石器実測図	26
第26図	遺構外出土土器実測図(2)	26
第27図	遺構外出土古銭拓影	26

付 表 目 次

第1表	出土図示土器一覧表	29
-----	-----------	----

図 版 目 次

第1図版	調査地遠景・分布調査
第2図版	分布調査・土層序
第3図版	遺構全景
第4図版	第1号住居址・溝址1・土城3
第5図版	第2号住居址・溝址2・第1号住居址炉
第6図版	第2・3号住居址・溝址2・土城5
第7図版	第3号住居址・土城5・1・2
第8図版	土城1・4
第9図版	土城6・7・溝址3
第10図版	第1・2号住居址出土土器
第11図版	第1号住居址・遺構外出土遺物
第12図版	調査スナップ
第13図版	調査スナップ

第1章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至る経過

若槻・徳間・稲田・田子・上野・吉地域を対象にした学区を擁する若槻小学校も、新興団地の造成が年々ふえ続け、児童数が増加し、現施設ではその収容が困難になってきた。そこで長野市教育委員会は児童数増が著しい前記地籍を分割し新たに徳間・稲田・東徳間及び西三才・駒沢新町を学区とする新設小学校を徳間地籍に開設する運びになった。

このため教委学校施設課・長野市土地開発公社はその用地を求めていたところ、地理的意味において、又環境的要素をふまえ、この地に開校するのが適当との結論を得、用地の確保を進行していた。

ところが、地下に埋蔵されている先人の生活址が、周辺の調査から存在しないとの断定できない位置及び地形であったのと、開発の規模の大きいのを考慮しながら、遺跡の有無、もしあった場合の調査方針を決するため試掘を伴う分布調査を実施することにした。

1 分布調査

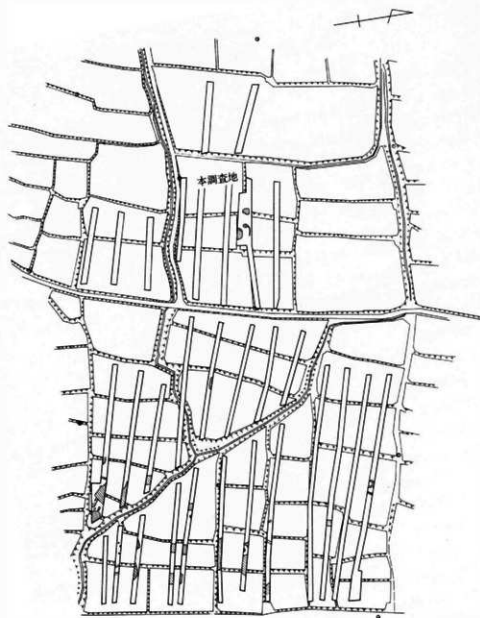
重機により地層（包含層）の確認と遺構があった場合その性格と密集度をさぐることに主力を置き、等高線を縦断する上から下へ約10mの間隔で巾1.5mのトレンチを12本あけた。もとよりこの調査では農道・水路・未買収地等があり、これらの破壊できないという制約下で実施したもので一部未調査もあるが、以下の調査結果を得、本調査の実施が必要となった。

(1) 第1図のとおり調査地上段において、粗分布の住居址を含む遺構があり、そのほとんどが弥生時代のもので、微地形をよく選定しているようである。下段では平安時代以降の土器の出土が著しく、住居址等の遺構が割合広い範囲に展開している。

(2) 本地は浅刈川扇状地の扇央部先端近くに位置し、ここから弥生時代の遺構・遺物は新発見のものであり、また学術上重要な資料を提供するものと思われる。

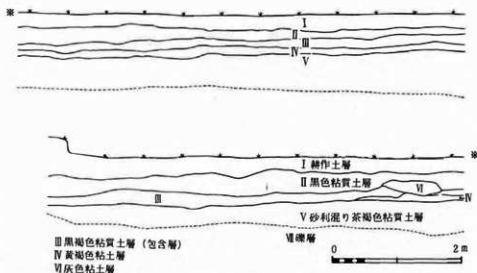
(3) 基本的土層は第2図（調査地付近）にみるとおり、耕作土層・黒色粘質土層・黒褐色粘質土層（包含層）・黄褐色粘土層・灰色粘土層・砂（砂利）混り茶褐色土層そして礫層の土層序になる。耕作土第2層及び第3層は上部に薄く、下部に厚いという水田開発の影響があるものの全体的にみれば調査地南側は礫・砂利層までが深く1.8mを測り、北にいくにしたがって浅く50cm程になる。いわば北に基盤的砂利層が上がり、覆土が少ないことが判明した。

(4) 出土遺物は先に述べたとおり、上段においては弥生時代中期の甕・壺・高坏・浅鉢形土器片を得、それに混じるように土師器・須恵器が、また下段から平安時代に比定される土師器甕・坏形土器、須恵器同種及び灰釉陶器の碗・長頸瓶片等が主として出土した。



第1図 分布調査遺構推定図

(5) これらの調査の結果、上段では東西25m・南北35mの範囲に遺構があり、下段では東西70m・南北80mの範囲に展開するものと予想される。



第2図 土層断面図

(6) 新設校建設計画を考えるに、上段は現地形を削平し校舎屋をつくり、その土砂で下段を埋めたて校庭を造成する計画であった。調査体制及び調査に対し後への調査責任を考え、上段は本調査を実施し、下段遺構地は所在記録をとるとともに砂あるいは後の調査に対応するためビニールを敷きつめ、現状で保存することに決した。

(7) 遺跡名について諸々検討した結果、浅川扇状地遺跡群内の徳間地籍にあるということで徳間遺跡と呼称し、その範囲が不明確であり、また徳間地籍に建設される小学校であるので、徳間小学校地点遺跡とした。

2 本調査

前記の分布調査の結果をもとに、上段・下段とその遺構密集度を分け、小学校建設のため削平される上段を本調査をし、下段を現状にて保護するため確認遺構面をビニールで覆う措置をとり埋め戻すことにした。

調査地は分布調査で弥生時代の遺物が最も多く出土していた地点を中心に南北55m×東西27mの範囲で、調査期日は各種行事、調査を調整の上11月8日から約2週間の予定で実施した。

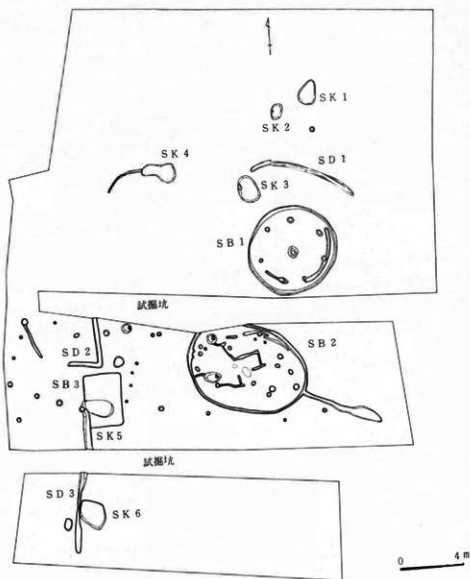
第2節 調査日誌

7月23日 関係者立合のもとに調査区を設定する。

7月24日～8月2日 重機を主力にトレンチ調査を行う。あわせて遺構・土層の判断調査を実施する。

8月3日～8月4日 調査測量及び遺構性格確認調査を実施する。

8月4日～8月15日 調査結果のまとめ、及び調査報告書を作成する。(以上分布調査)



第3図 遺構分布図

11月8日～10日 重機による表土除去を行いながら、遺構の存在の確認を行う。調査器材を搬入する。

11月12日（晴） 本日より人力により本格的調査を開始する。始業前教育管理部長の挨拶のもとに結団式を行い、残土処理から調査を実施した。前日の雨で足がすべり調査は遅滞する。

11月13日（晴） 昨日に引き続き残土処理をする一方、第1号住居址を中心とする遺構プランの追求を行う。

11月14日（晴） 第1号住居址を中心とする付近の遺構プランを追求するとともに、重機による表土除去が完了した地点の残土処理を行う。調査会長（教育長）現場視察。

11月15日（晴） 昨日と同作業を行う。本日で重機による作業を終了する。第1号住居址・土坑1～4の検出作業を開始する。教育管理部長・建設部建築課長来訪。

11月16日（晴） 重機による残土処理を実施する一方、昨日に引き続き第1号住居址の調査及び雨で確認された第2・3号住居址のプラン追求を行う。

11月17・18日（雨） 現場作業を中止する。それにかわり土器洗浄・図面整理調整を行う。

11月19日（晴） ぬかるみにて一輪車動かす困難を極める。土坑1～4の精査後写真撮影を行う。新たに第2・3号住居址の調査を開始する。

11月20日（晴） 第1号住居址の調査を修了し、写真・実測作業を行う。あわせて土坑の実測を行う他は昨日と同様作業を行う。

11月21日（晴・曇） 第2・3号住居址及び調査地西側の遺構の調査を進めるも、天候の状態悪く、その進行の速度をはやめ、第2・3号住居址の写真撮影をする。

11月22日（雨・曇） 前日の判断が正しき中し、調査地内へは入れず、土器洗浄作業を行う。

11月23日（雨・曇） 調査・土器洗浄を断念し遺物整理を行う。（西三才育成会約40名現地視察）

11月24日 住居址（2・3号）の精査及び、溝址・土坑5の調査を終了し、写真・実測作業を行う。

11月25日 第3号住居址・溝址・土坑5を再確認調査して、全調査を完了する。器材撤去をする。

以後、調査員暇をみては調査結果を報告書へまとめるため整理する。

第3節 調査会（団）の編成

調査会（団）の編成は以下のとおりであり、組織は四ツ屋遺跡第2・3次調査と同じである。

1 調査会

会長 中村 博二（長野市教育委員会教育長）

委員 米山 一政（長野市文化財保護審議会々長）

桐原 健（　　　　委員）

	森嶋 稔 (調査団長)
	千野 和徳 (長野市教育委員会教育管理部長)
	関川千代丸 (〃 囑託)
	矢口 忠良 (〃 社会教育課主事)
監事	青沼欣一郎 (〃 庶務課長)

2 調査団

調査団長	森嶋 稔 (日本考古学協会々員・上山田小教諭)
〃 主任	矢口 忠良 (〃 ・長野市教育委員会主事)
調査員	原田 勝美 (長野県考古学会々員・長野市役所)
	石上 周蔵 (〃 ・信大学生)
	小林 秀行 (〃 ・ 〃)
	直井 雅尚 (〃 ・ 〃)
	竹内 稔 (〃 ・ 〃)
	青木 和明 (〃 ・明大学生)
	奈須野由美 (〃 ・ 〃)
	市村 勝己 (〃 ・ 〃)
	青木 一男 (〃 ・ 国学院大学生)
	臼田美智子 (信大学生)
	矢野あけみ (〃)

3 調査参加者一覧

花岡 実・金子房吉・太田宗太郎・若月文の・林 幹夫・青野間礼三・高島武夫・和田恒夫
 ・小市 勝・市村助三郎・藤沢信子・金子庫子・藤沢好子・西沢延子・竹内みきよ・小木曾美
 貞・丸山六児・藤沢寛美・藤沢月子・藤沢直子・玉井和子・竹腰節子・丸山正義・今井たけ
 ・藤沢昭子・小松すみ子・金子利江・玉井まさ江・野村綾子・飯島みち子・竹内悦子・金子とく
 子・倉石やえ・金子藤子・生島高俊・金子朋子・佐藤和子・田中富子・松田みち・竹腰千代子
 ・金子雪枝・藤沢あき子・金子佐千子・藤沢美枝子・酒井治子・金子きよみ・松田玉枝・中條
 くら子・藤沢みち子・太田恵美子・藤沢和子

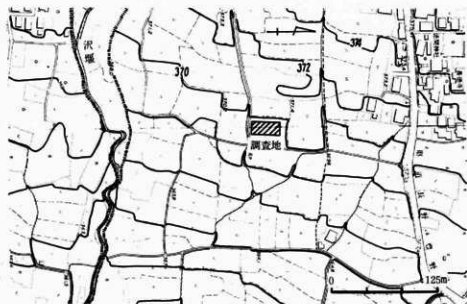
これらの方々の他、重機等の手配をいただいた藤森建設(株)をはじめ、徳間地区の区長金
 子肇氏等には調査に際し諸々御迷惑をかけ、作業員の手配には若槻支所長宮沢昭二・高齢者事
 業団長花岡実・徳間婦人会長藤沢伸子の各氏には絶大な御協力、御指導をいただいた。記して
 前記団体員各位の感謝にかえたい。(事務局)

第2章 遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境

浅川扇状地は飯綱高原(山)に水源を有する浅川と駒沢川の2主流より形成された扇状地で、その影響範囲は旧長野市の北半分の市街から、北では三才地区を包含するようである。下方(東)は千曲川の堆積が強かったようで、柳原地域では小島十二遺跡群が存在する自然堤防が発達し、それより下流の赤沼地籍付近では沖積湿地化する。この扇状地の扇端は東和田から下駒沢地籍を結ぶ線上にあるようである。この扇状地を形成した主流は相当の荒れ川であったようで、多量の礫・砂利層の土層序をとる。ちなみに本調査地に関与する扇頂の福岡地籍での標高は約450mで扇端の下駒沢地籍では337mになり、本調査地では370mになる。現在その地目のほとんどが水田化又は団地化し、そこに果樹園、畑地が混在する。本調査地付近では北国街道がこの扇状地を横断し、その両脇に住宅地が連なる他は水田である。近時これより上部では若槻団地が、下部では長野工業高等専門学校、市立早月高校及び駒沢団地が造成され、新たな住宅街として変貌をとげつつあり、近い将来調査地の新設小学校設置に伴い更に新たな開発が行なわれる可能性がある。

調査地はこの北国街道と長野工業高等専門学校の中間点にあたり、周辺はすべて水田である。標高は370~366mである。北は若槻丘陵が近接し、南には沢堰(新田川)があり、これらが地形的に扇状地を小区画した扇央の端部近くに位置する。



第4図 地形図及び調査地



第5図 調査地周辺の主要遺跡分布図

1. 徳間遺跡(調査地) 2. 古層敷遺跡 3. 駒沢祭祀遺跡
4. 駒沢新町遺跡 5. 姫宮遺跡 6. 稲積一里塚

第2節 歴史的環境

新旧の北国街道を除いて歴史的事象は本調査地にない。旧い街道は三才田子遺跡で確認された駅館(駅家)址(高床建物址)にみられるように、古代東山道支道越後道であった可能性があり、その後稲積に一里塚がつくられ、新街道へと移行する街道変遷史にとって興味ある地籍である。^(註1)

考古学的には今まで確認されなかった新興の地であるが、浅川扇状地は浅川遺跡群と近年の調査で把握されるようになった。特に駒沢川の影響によるものとして、扇頂部には周知の遺跡として北部中学校西遺跡があり、昭和51年に調査を実施して平安時代集落を検出した浅川西条遺跡、昭和51年度に分布調査をしその結果を昭和52年度に古代窯業史研究所(所長大川清国土館大学教授)が調査した浅川神楽橋遺跡の弥生中期～平安時代の遺構があり、更に本調査地南側には同じ条件の稲田姫宮遺跡が展開している。本調査地東には昭和42年調査を実施した祭祀遺跡として全国的に著名となった駒沢祭祀遺跡がある。現在この地は遺跡公園として保存されている。調査では湧水地を選んだ古墳時代中期から奈良時代にかけて焼土・集石及び土器集積を伴う7ヶ所の遺構が確認されており、その土器は高坏・器台・手捏・小形丸底形土器等祭祀遺物を中心に、そこへ多量の甕形土器、若干の坏形土器を加え確認個数が500有余という他に例を見ない遺跡である。この他出土遺物として刀子等の鉄製品の他勾玉・鏡・玉・剣の石製模造品がある。この遺跡の北西に駒沢新町遺跡があり、昭和43年度に調査され、平安時代集落を検出し注目すべき遺物に懸仏銅型がある。これらは本調査地下方で確認された平安時代遺構との関係を強くし、遺跡群内の一つであろう。また北側若槻丘楼下段の駒沢川が形成した河岸段丘上の現在緑ヶ丘団地になっているところに古屋敷遺跡がある。ここは昭和45年度において調査が実施され古墳時代を中心に平安時代にかけての集落址の一部が検出されている。^(註2)

このように断片的に調査が実施されるように、また調査を実施しはじめてその重要性が認識されるように、まだまだ重要な遺跡が眠っているようで、今回の調査のように遺跡の存在がほとんど確認されていなかった地点に、また思いもかけない弥生時代中期の遺構が存在していたように調査の進展に伴って問題を提起する遺構・遺物があるよう思える。(矢口忠良)

註

註1 米山一政「三才田子遺跡調査概報」『信濃考古』No.22・28(昭和42・44年)

註2 長野市教育委員会編『長野市の文化財』所収(昭和46年)

◇ 『浅川西条』長野市の埋蔵文化財第2集(昭和51年)

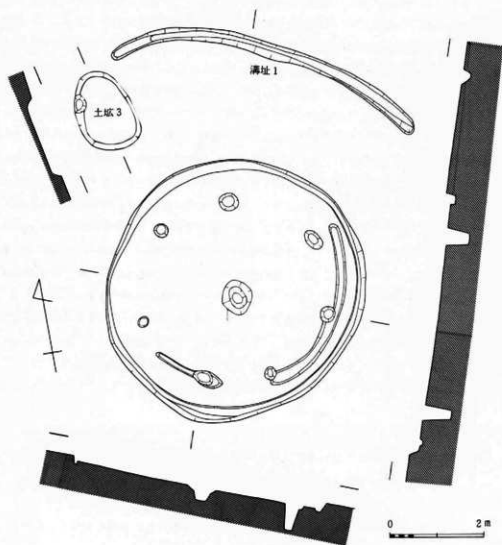
浅川神楽橋遺跡の本調査を除き、他は長野市教育委員会が調査を実施し、資料は長野市教育委員会が保管している。

第3章 遺構と遺物

第1節 住居址

1 第1号住居址（第6～11図、第4・5・10・11図版）

遺構 調査地のほぼ中央に位置しており、黄褐色の粘質土層に掘り込まれた状態で検出さ



第6図 第1号住居址、土坑3、溝址、遺構実測図

れ、形状が明確である。プランは主軸方向N-30°-Eを指し、直径5.50mの円形を呈する。壁は直に近く、15cm程度の壁高になるが、若干高くなる可能性がある。床面は平坦でかなり堅緻である。柱穴は7個検出され、それらは壁に沿ってほぼ等間隔の円形配列になる。それぞれ30~40cm程の直径で、40~50cmのかなりの深さをもった柱穴であるが、そのうち南側の3個は内側の周溝と重複している。周溝は壁に沿って全周しているものと、その内側に東・南壁にそってほぼ半周しているものの2本が検出されたが、この部分における拡張の結果と考えられる。炉は住居址のほぼ中央に設けられており、不整円形の南北軸70cmで深さ25cm測る意外と大形で深い床炉の形態をとっている。その内部から破片状で2個体の土器が出土している(第7図5・8)。出土遺物は、覆土・床面からかなり多量の土器片が出土している。

遺物 出土量は多く、土器片は800点に及ぶ。そのほとんどは覆土中からである。

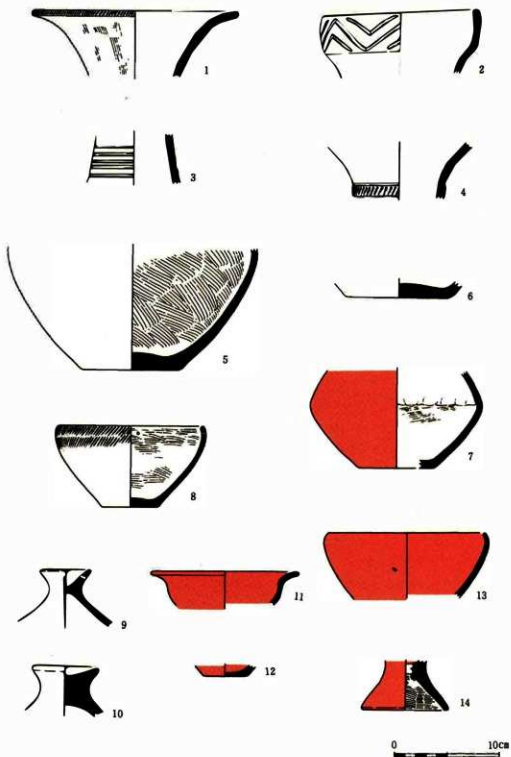
壺形土器(第7図1~6、第9図、第10図1~7) 口縁部形態には、外反し朝顔状を呈するもの(第7図1)と、立ち上がりをもつもの(第7図2、第9図1~9)がある。外反するものは口縁端部に縄文を施し、器表には刷毛整形痕が認められる。立ち上がりをもつものには、若干の段を有するもの(第7図2、第9図7)と、ゆるやかに内弯するもの(第9図3・5)との二形態がある。口縁端部は面取りされ、縄文(第9図2・5)及び刻み(8)が施される。文様帯の構成は、鬘描重山形文(第7図2、第9図1・2)、縄文を地文とした鬘描鋸齒文(第9図3~5)、鬘描直線文と鬘描鋸齒文(第9図6)、鬘描弧線文(第9図7)、鬘描直線文(第9図8)がある。頸部には文様帯として、数条の鬘描直線文(第7図3、第9図10)、その直下に鬘描鋸齒文(第9図11~16)、縄文を地文とするもの(第9図13)がある。施文の結果突帯状を呈するもの(第7図4)も認められる。体部最大径が下半にあり、ゆるやかな丸味をもって底部に至る器形になる(第7図5・6)。内面にはあらい刷毛整形痕がみられる。文様帯の構成は、鬘描弧線文と鬘描直線文による懸垂横帯文(第9図17・18)、鬘描弧線文だけの懸垂横帯文(第9図19・24)と、鬘描直線文・鋸齒文・重山形文・弧線文を組み合わせたもの(第9図21~24、第10図1~7)になる。縄文を地文とするものはみられない。

赤色塗彩壺形土器(第7図7) 器外面は鬘による磨きを施したのち赤色塗彩されている。最大径部内面は輪積み成形痕が認められ、上部に指頭圧痕が、下部に刷毛整形痕が残されている。

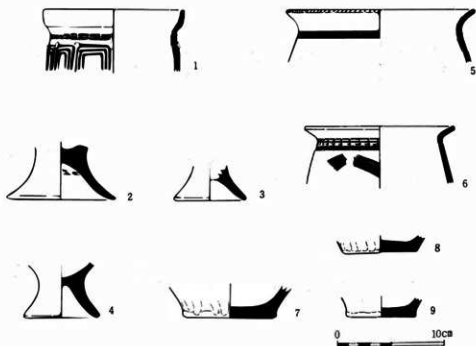
無頸壺形土器(第7図8) 最大径は口縁部近くにあり、2孔一対の小円孔を焼成前に穿っている。口縁部には縄文を2段に施し、無文部は鬘により磨かれている。内面は刷毛整形痕のちナデで調整される。

鉢形土器(第7図11・12) 口縁部が大きく外反し、ゆるやかに内弯して底部に至る形態のもので小形である。底部を除き内外面とも赤色塗彩されている。

高環形土器(第7図13・14) 13は環部にあたるものと考えられるが鉢形土器となる可能性もある。口縁が内弯する形態になり、内外面とも鬘による磨きを施したうえに赤色塗彩されてい



第7图 第1号住居址土器实测图(1)



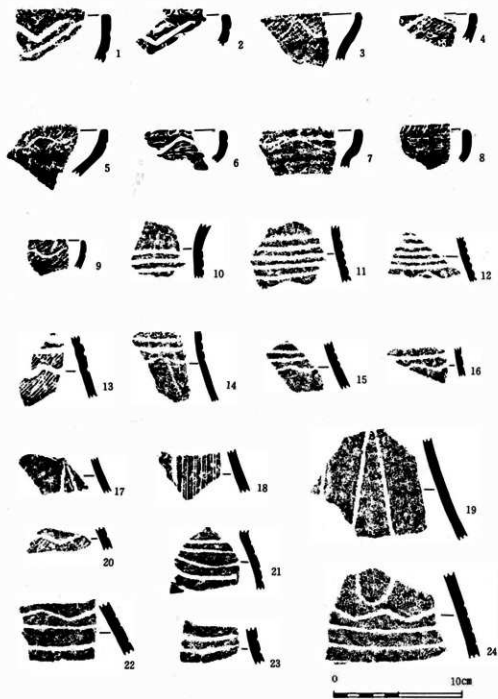
第8図 第1号住居址土器実測図(2)

る。外面にはモミ痕が残されている。14は脚部で、やや内弯する形態になり、端部は面取りされている。外面は篋による磨きを施したうえに赤色塗彩されている。内面にはあらい刷毛整形痕がみられる。

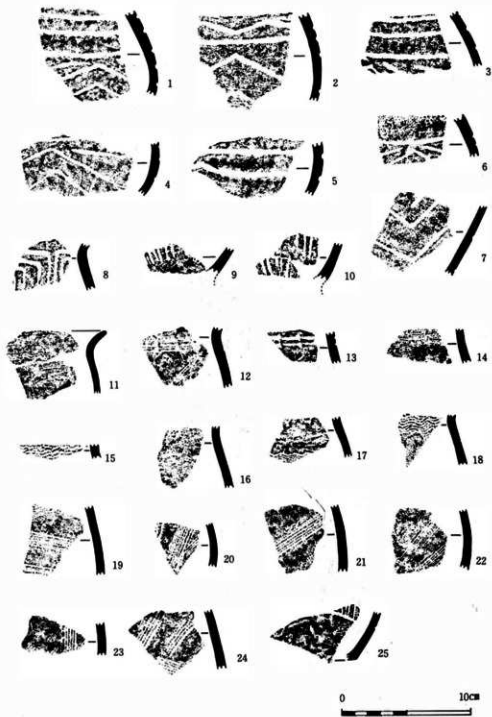
蓋形土器(第7図9・10) 9はつまみ部に一孔を有しており、ゆるやかに外反する形態をとる。器壁はうすく小形である。10は大形の蓋形土器のつまみ部で、上面はナデにより調整されている。

台付甕形土器(第8図1~4、第10図8~10) 口縁部は段を有して立ち上がり、胴が張らずに上部に至る器形になる。頸部に3本歯の櫛状工具による簾状文、胴部に細い棒状篋による「コ」の字重ね文を施す。この上端には円形粘土を貼付した痕跡が認められる(第8図1)。台部はゆるやかに外反し、内面に刷毛整形痕を残している(第8図2~4)。

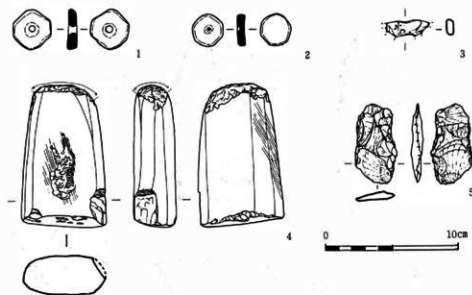
甕形土器(第8図5~9、第10図11~24) 口縁部は外反し、胴上半に最大径をもつ器形になる。底部は指によるおさえ、ナデによりやや張り出す(第8図7~9)。口縁部は横ナデにより整形され、端部は面取りされるもの(第8図6)、刻みが施されるもの(第8図5)がある。頸部には櫛掃簾状文(第8図5・6、第10図12~14)、櫛掃波状文(第10図11・15~19)が施されている。体部の施文は櫛掃条痕文(第10図19~23)であるが、短い条線による羽状文(第10図24)もみられる。櫛歯の数は6~8本である。



第9图 第1号住居址土器拓影(1)



第10图 第1号住居址土器拓影(2)



第11図 第1号住居址土製品・鉄製品・石器実測図

不明土器（第10図25） 底部付近の破片でたぶん浅鉢形になるものと思うが、体部下半にやや太い横走る沈線と罫描斜走線により文様帯を構成する土器はこの種に類例がない。胎土は精選され、焼成は良好で、淡黄褐色を呈する。内面は罫状工具による磨きが施こされ、外面には罫削り痕を残す。

土製品（第11図1・2） 土器片を円形に加工し、中央に一孔を穿ったものである。2は赤色塗彩土器片を利用し、孔は貫通していない。

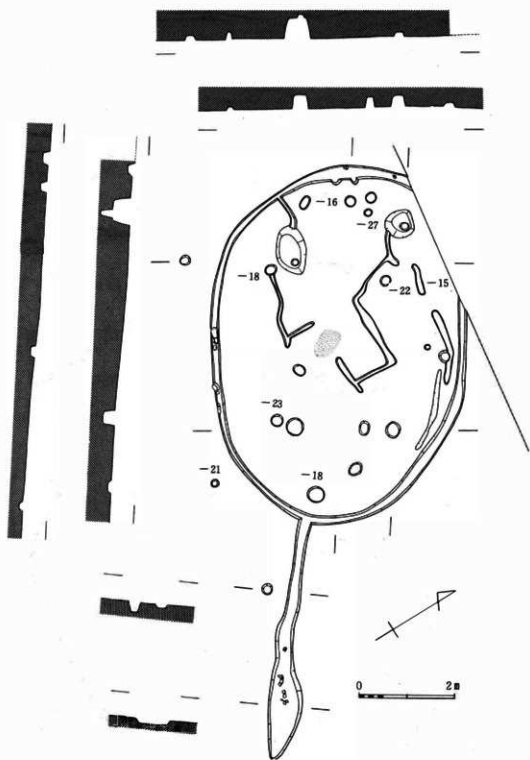
石器（第11図4・5） 4は石英閃緑岩製の太形蛤刃石斧を原形にし、その刃部付近の欠損面を磨がいた所謂石槌とよばれる再利用されたものである。基端は打痕が周辺全面にみられ、また主面中央付近、下面磨き部にもその痕跡がある。5は粘板岩製の小形の打製石斧形態のもので、あらい剝離痕を残す。

鉄製品（第11図3） 住居址覆土上面から出土したが、この面から土師器の破片も混入していることから、本遺構との関係は不明である。断面が隅丸長方形を呈する棒状のものである。

（青木和明）

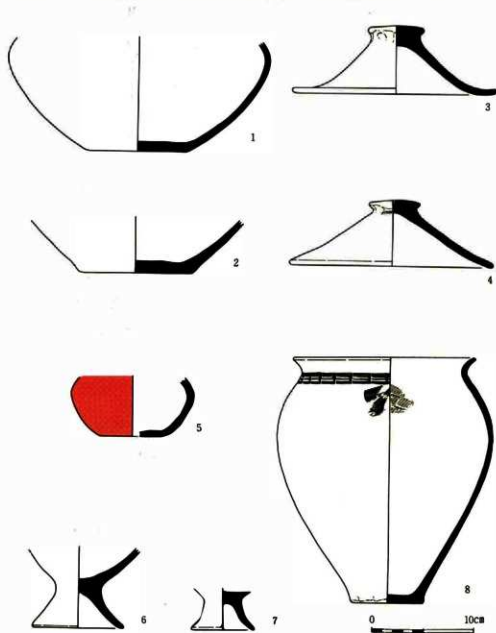
2 第2号住居址（第12～14図、第5・6図版）

遺構 第1号住居址の南側に隣接している。主軸方向はN-5°-Wを指し、長軸7.60m・短軸5.40mの小判形のプランを呈する。壁は調査では確認できなかった。開発及び表土除去時に破壊した可能性がある。床面は第1号住居址ほど堅緻ではないが、しっかりしている。主柱穴は基本的に4個方形配列されており、壁に沿って25～30cmの補助支柱穴がみられ、その他にも

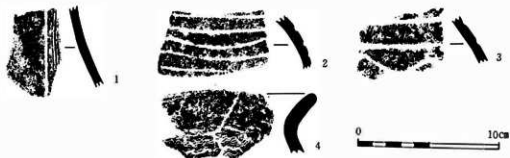


第12图 第2号住居址遺構実測図

ピットが多く点在している。周構は全周しており、ほぼ完形の土器がそこから多く出土している。炉はほぼ中央部に設けられ、わずかに窪み、内に焼土を伴う地床炉である。また、何本かの溝が床面から検出され、それも炉を中心とし、それより上部（西）及び北壁に添って展開する。間敷切りの施設であろうか。なお住居址の主軸方向東側に、長さ5.0m・巾20~70cm・深さ10cmの溝があり、覆土及び出土土器の状態から本住居址の付属施設と考えている。



第13図 第2号住居址土器実測図



第14図 第2号住居址土器拓影

遺物 出土量は少ないが、周溝（第13図1・3・4・6～8）と付属溝（2・5）から土器が一括出土し、セットとして把えることができる。

壺形土器（第13図1・2、第14図1～3） 第13図1は体部下半である。最大径が下った無花果状の器形が考えられる。風化が著しく整形は不明で、文様も認められない。2は底部片で外面にナデ調整が施されている。第14図1は体部上半を懸垂横帯文で、毘描弧線文と櫛描直線文の組み合わせになる。2・3は毘描直線文・弧線文・鋸歯文を組み合わせ文様帯を構成している。

赤色塗彩壺形土器（第13図5） 体部の器形は下半で屈曲する無花果状を呈する。外面は毘による磨きを施したうえで赤色塗彩されている。内面にはナデによる整形痕がみられる。

蓋形土器（第13図3・4） つまみ部から口縁に向かってゆるやかに外反するもの（3）と、直に口縁に至るもの（4）との二形態を呈している。いずれも、つまみ部は指頭あるいは刷毛状工具によってそり返り様に整形され、頂部はナデにより平滑化されている。4においては、つまみ頂部に一孔を有するが貫通はしていない。内面はナデにより整形されている。

台付変形土器（第13図6・7） やや外反する台部である。器面があれ整形等は不明である。

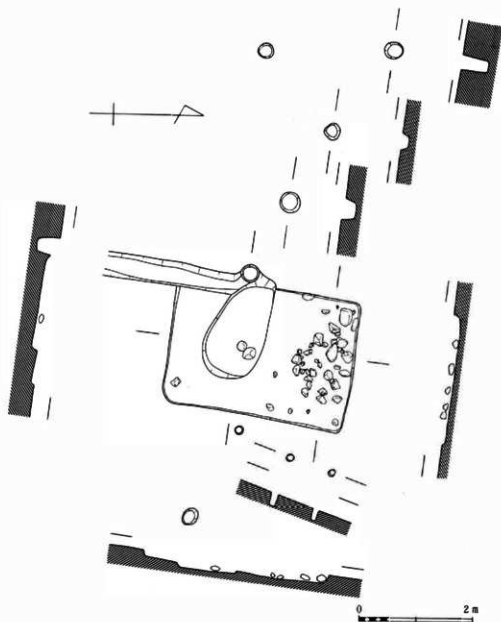
壺形土器（第13図8、第14図4） 8は口縁部が外反し体部上半に最大径をもち、小きめの底部に集約する形態を呈し、指圧整形後ナデ調整によって底部はやや張り出している。口縁部は横ナデによって整形され、内面上部に刷毛による整形痕が認められる。文様は、頸部に櫛描簾状文、体部に櫛描条痕文が施こされる。条痕文は風化によってほとんど観察できないが、クシ歯数は8本と認められる。4は肥厚する口縁部が外反する形態で、横ナデにより整形されている。頸部以下に櫛描波状文を施し、櫛歯数は5本以上である。

その他、弥生式土器片数十、土師器片数点、須恵器変形土器片1点が覆土中より出土した。

（青木和明）

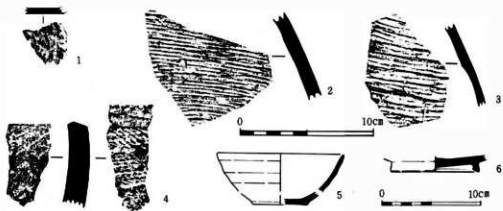
3 第3号住居址（第15・16図、第6・7図版）

遺構 調査地の西側に位置し、溝址3により西壁の南側が破壊され、また住居址南側に土坑5がありこれによっても破壊を受ける。プランは長軸3.2m・東西軸2.3mの小形の長方形になる。長軸方向はN-10°-Eである。掘り込みはやや傾斜を有しており、床面までの高さは西か



第15図 第3号住居址、土垣5、溝址3遺構実測図

ら東に地形が傾斜しているため、北壁15cm・東壁5cm・南壁13cm・西壁15cmを測る。床面は平担で軟弱である。当初カマドの残欠ではないかと想定していた西側の集石はその後の調査結果から人頭大から拳大のものまであり、その散布も北壁一帯に及ぶ広範囲のもので、中に焼石・炭化物を含んでいたが、カマドとは考えられなくなった。またこの地点から土垣状遺構が確認されなかったし、すぐ北に隣接する溝址2からもこれらの礫が確認されている。意味不明な集石群である。柱穴等内部施設はない。



第16図 第3号住居址遺物拓影・土器実測図

遺物 出土量は少なく、集石群及び覆土からのものであり床面からのものはない。

土師器(第16図1) 承切痕を残す坏底部片で、内面は研磨され黒色処理される。この他彫削りされる変形土器片が数点出土している。

須恵器(2・3・5・6) 坏は体部の一部が欠損し底部と接合しないが同一土器の高台が付されないものと、底部が丸味をもち外開する高台が付されるものがある。前者の底部は承切痕を残すが、後者のそれは彫削りが施こされている。他は變体部片で、外面にタタキ目を残している。

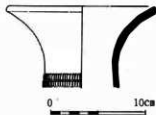
古瓦(4) 集石中より1点出土したもので、須恵質の平瓦片である。布目痕と縄状のタタキ目を明瞭に残し、縁部に切り離し痕が観察できる。(小林秀行)

第2節 土坑

1 土坑1(第17・18図、第7・8図版)

遺構 調査地北端から検出したもので長軸1.5m・短軸1mのタマゴ形を呈し、深さは15cm程である。覆土中に炭化物を少量含んでいた。

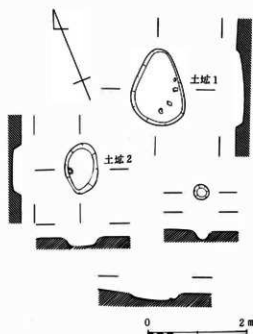
遺物 出土量は意外と多く、そのほとんどが壺の破片である。口縁部の器形は外反する朝顔状を呈し、口縁端部は面取りされ、器面は内外とも甍により磨きが施されている。頸部には甍描直線文が施され、突帯状を呈し、そのうえに甍による刻みを加えている。その他みるべきものはない。



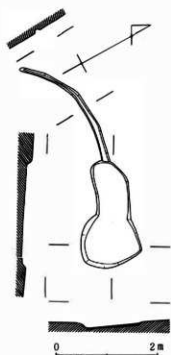
第17図 土坑1土器実測図

2 土坑2(第18図、第7図版)

遺構 土坑1の南西側に位置し、長軸1.1m・短軸0.7mの楕円形を呈し、深さは18cmである。西隅に直径10cm程のピットを有する。出土遺物はなかった。



第18図 土埴1・2遺構実測図



第19図 土埴4遺構実測図



第20図 土埴4 土器拓影

3 土埴3 (第6図、第4図版)

遺構 第1号住居址の北側に隣接し、長軸 1.8m・南北軸 1.2mの不整楕円形を呈し、深さ 15~17cmで底は平坦である。西側隅に40cm×25cm、深さ 8cm程のピットを有する。

遺物 弥生式土器片が数点出土しているがみるべきものはない。

4 土埴4 (第19・20図)

遺構 第1号住居址の西側に位置し、長さ2.1mのヒョウタン形を呈し、深さ 5cm程である。西側に長さ 2.6m、巾10cm、深さ 5cm程の弧形の溝が付属する。

遺物 壺形土器頸部(第20図1) 体部(2・3)片で、7は帯描直線文と刺突文による懸垂横帯文である。他に弥生式土器片十数点が出土している。

5 土坑5 (第15図、第6図版)

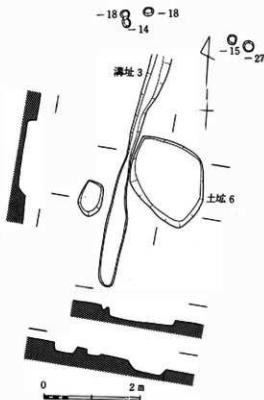
遺構 第3号住居址の中央に位置し、住居址より新しい。長軸 2.0m・南北軸 1.1mの楕円形を呈し、深さは10cm程である。覆土は黒褐色で、20cm程の礫が2個検出された。

遺物 出土遺物はなかった。

6 土坑6 (第21図、第9図版)

遺構 溝址3の東側に接してあり、長軸 2.0m・南北軸 1.5mの楕円形を呈し、深さは20cm程である。覆土は黒灰色を呈し、灰層化していた。

遺物 弥生式土器片十数点が出土したが、みるべきものはない。(小林秀行)



第21図 土坑6、溝址3遺構実測図

第3節 溝 址

1 溝址1 (第6図、第4図版)

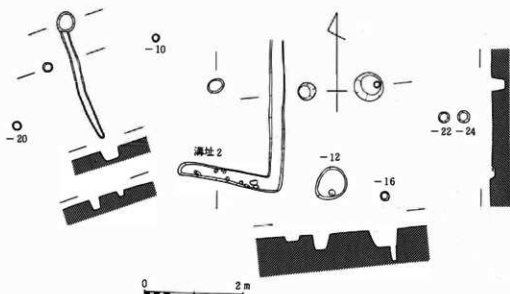
遺構 第1号住居址北側に位置し、その距離は約 2.5mで、住居址の弧にそってある。全長 7.0m程で巾20~30cmを測り、深さは17~20cmで、底面は凹凸がある。住居址と何らかの関係ある溝とみている。出土遺物はなかった。

2 溝址2 (第22図、第6図版)

遺構 第3号住居址の北側に位置し、南北方向に 3.0m、東西方向に 2.2mのL字形を呈するものと、その上部に少し離れて西に振る南北 2.3mで先端に径38cmのピットを有する溝状遺構である。本来の意味の溝でない。巾は20~30cmで、深さは10cm程のU字溝である。住居址に近接する部位からは人頭大よりやや小さめの礫の集中ヶ所があった。出土遺物はなかった。

3 溝址3 (第15図、第9図版)

遺構 第3号住居址西側から南方向へ9.0m、巾40cmで伸びるU字形直線溝で、深さは10cm程である。出土遺物はなかった。(小林秀行)



第22図 溝址2遺構実測図

第4節 その他の遺構・遺物

1 遺構 (第3・22図、第3・6図版)

第3号住居址周辺に柱穴様の小ピットがいくつかあった。径は20～50cmのもので、その形態は一様でない。また柱穴列として南東から北西方向に4個配列が認められ、それから東へ直角に折れるように溝址2先端のピットにかけ3個あるが、前者の柱穴間隔に比べ小さい数値である。他は散在する。遺物の出土はなかった。

2、遺物 (第23～27図、第11図版)

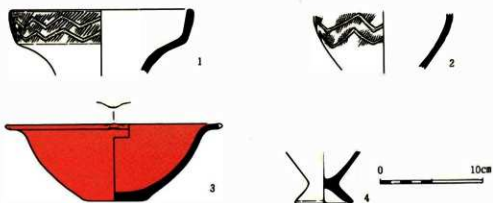
遺構外出土のもの及び包含層出土のものをあてる。

縄文時代土器

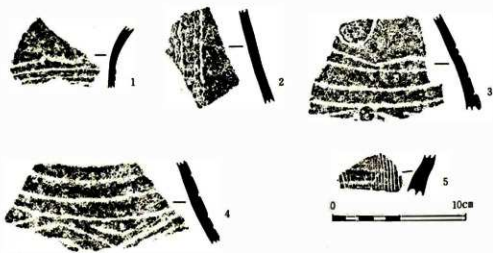
前期の斜行縄文を施す土器片が、第1号住居址付近より出土するが、周囲及び器面の磨耗が著しく、転流してきたものであろう。

弥生時代遺物 (第23・24図1～4)

壺形土器 (第23図1・2、第24図1～4) 第23図1は壺形土器口縁部で、立ち上がりももち翼状口縁を呈している。内面は刷毛整形のちナデで調整している。口縁端部は面取りされている。施文は縄文を地文とし、毘描重鬚歯文を施している。第23図2、第24図1～4は壺形土器



第23図 遺構外出土土器実測図(1)

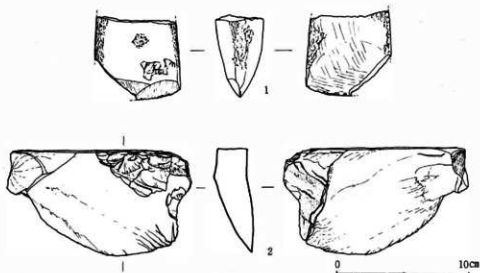


第24図 遺構外出土土器拓影

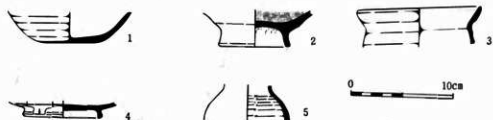
体部で、第24図2は罫描弧線文と櫛描波状文との組み合わせによる懸垂横帯文である。3は罫描弧線文による懸垂横帯文下に罫描重層歯文・直線文・重山形文の組み合わせ文様帯をもつもので、円形粘土を貼付し、その上を刺突している。さらに沈線部分には赤色塗彩が残存している。第23図2は小形壺の体部下半であり、縄文を地文とした罫描重層歯文による文様帯を施している。器外面無文部は罫により磨かれている。

鉢形土器(第23図3) 口縁が大きく外反し、体部がゆるやかに内弯して底部に至る形態を呈する。口縁端部には山形突起を有する。底部を除き器面内外は罫による磨きを施したうえに赤色塗彩されている。

台付甕形土器(第23図4) 台部と考えられ、わずかに外反し、端部に至る形態を呈している。



第25図 遺構外出土石器実測図



第26図 遺構外出土土器実測図(2)

石器(第25図) 太形給刃石斧刃部付近破片(1)と大形の剝片石器(2)が出土している。

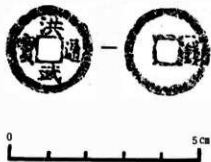
歴史時代遺物(第26・27図)

土師器(第26図1~3) 1は水引き技法よりつくり出されたもので、底部に承切り痕を残す。2は所謂足高高台が付される環形土器で、ロクロ成形で内面は研磨され黒色処理される。3は甕の口縁で、やはりロクロにより整形される。

灰軸陶器(第26図4・5) 4は碗の高台付近の破片で、内外面とも半透明の釉が施こされる。5は4と同様の釉がかけられ、器形は小形の甕と考えられる。内外面に明瞭なロクロ成形痕を残す。

攪鉢(第24図5) 須恵質で、内面に9本の条線を浅く切っている。中世のものであろう。

古銭(第27図) 洪武通寶・永楽通寶の二枚出土した。(青木和明・小林秀行)



第27図 遺構外出土古銭拓影

第4章 結 語

弥生時代の善光寺平において、集落として展開をみせるのは栗林期とされている。またこの文化は弥生初期の文化が波及した後、地方色を有した独特の内容を持ち、地方的にまとまる文化圏との評価を受けている。確かに遺跡数の増加からうかがい知れようが、現況では残念なことに土器の文様・器形をもとにした様式論のみ先行している感がある。遺跡・遺構を混じえた論考がなされないのは何故であろうかと考えてみた。該期の遺物を出す遺跡が多いにもかかわらず遺構を伴うものが意外と少ないということと、調査結果が報文として提示されていないという点がその要因として強調されるように思う。

こうした意味から、栗林期を理解する上で今回得た資料を出来る限り早く世に出すことが調査の性格及び調査したものの責任として痛感した次第である。そのため浅学の身でもてあます資料であるので、事実と問題点をあげて結語といたしたい。

① 地形の問題である。浅川扇状地において栗林期の集落が予想されるのは浅川神楽橋遺跡で、この周辺に浅川ガソリンスタンド遺跡・北部中学校西遺跡があり、これらは扇頂部付近に展開するもので、扇端に旭幼稚園遺跡、三才田子遺跡があるが、本遺跡のように扇中部でその遺構は確認されていない。何故にこの地を選定して居住したのであるかという点と、水稲栽培を業とする人達の生産地の問題である。これは南約 150m に沢堰があり、この地は最大巾35m を測る窪地になっており、意外とこの地に求められるのではなからうか。尚遺構所在地は微高平坦地になる。

② 集落規模の問題である。これは①の生産地からの規制を受けているのではないかと考えている。それ故この扇状地内で、散在的に出土する遺物は本調査地のように2～3軒の小規模の住居群と考えられる。

③ 住居址及び土坑等のあり方である。栗林期のものは2軒の住居址と、土坑6ヵ所・溝址1ヵ所を確認した。まず住居形態である。第1号住居址は円形を呈するのたしい、第2号住居址は小判形をしている。土器の文様・器形からは時間差がうかがえなく、また同時存在は不明であるが、円形から楕円形への住居形態の推移を示す絶好の資料といえる。次に第1号住居址と北に近接する溝址1との関係である。偶然のあり方であろうか。遺物が入っていないことも気になる要素である。住居址の炉及び周溝のあり方から入口部を南側に想定しているため、この溝は住居址外縁に構築される所謂土盛状遺構の均一化のために掘られた遺構と積極的に考えている。またこの住居址には地床炉がピット状に掘られており、内に火種壺と思われ土器が設置されており、これもまた炉の宴遷の中で注目に値する資料と考えている。第2号住居址では東に延びる溝と炉周辺の細い不規則な溝である。まず溝であるが、全く覆土が同質で、地形的に床面との傾斜にあわせて掘られており、また床面にその痕跡をうかがうことができなかつた

ので住居址と関連した遺構と考えている。即ち周溝は土質の性格から第1号住居址にもみられた意外と深い周溝にみられるように排水に困惑した結果と考えている。次に炉周辺のわりと鋭利に掘り込まれた細い溝である。これは炉を神聖化し、水が入らないようにする施設で奥(西)が祭址の要素があった位置とは考えすぎであろうか。又は単純に間敷切り施設と考えても、炉を守る意識が強くなるか。土坯は浅く、規模・形状から土坯6を除いてそれ程意味を有していないように思え、むしろ溝状遺構を付属する土坯4のように水溜と考える要素があり、地形的に考えればこれが正当との考えが成り立つのだが問題が残るところである。

④ 出土遺物の問題である。単純遺跡であるので、紹介した遺物に混入物はほとんどないものと考えている。それ故に他の遺跡からの相対遺物を様式化する前に本遺構に関与する遺物を使用していただければ念が強い。この遺物群の中で注目されるのは、櫛状工具の使用が著偏的に多くなり、変形土器口縁部にもその痕跡が認められということである。遺構をふまえ粟林期編年にはまだ時間を要し考えなければならない問題を多分に含んでいるように思える。

⑤ 下部遺構群とした歴史時代の住居址群の問題である。この扇状地では単発的であるが、後川西条遺跡にみられるとおりある程度の規模をもった集落が予想され、この予想が駒沢新町遺跡にみられ、分布調査でもこの傾向が確認されたところである。本調査で得た資料はこれに関与するものと思われるが、住居としての機能をそなえていない点、気になる要素である。今後の調査結果を期待したい。

以上 ⑤を除き粟林期の含む問題を知り得た知識の中から記したが、偏見と独断とのそりまはぬがれ得ないところである。多方の御教示をお願いした。

尚第3章で中心的に記した遺物について以下の現状及び根拠によったので付記しておく。

本遺跡出土の遺物は、包含層が粘質土のため保存状態が悪く、時に土器においては器表の風化が進み、整形痕、文様など観察が困難な状態であった。このため図化・記述にあたっては、確認できる範囲での図上復原・記述にとどめた。不備な点は御容赦願いたい。

また、記述における土器施文用語は、笹沢浩氏の論文(1977「考古学ジャーナル」131・133・134、1971「信濃」23-12「善光寺平における弥生時代中期後半の土器」)を参考とした。

(矢口忠良)

第1表出土陶器一覽表

遺物番号	器種	法 量(cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調		出 状
		器高	口径	底径					外 面	内 面	
第1号住居址 (第7・8図)											
1	壺		19.4		朝顔状口縁・端部面取り	刷毛ナデ・縄文	小 砂	不良	灰褐色	灰褐色	覆
2	*		15.0		翼状口縁 ・ *	瓦拵重山形文	＊	＊	赤褐色	赤褐色	覆
3	+					* 直線文	+	+	*	*	覆
4	+				朝顔状口縁	* 重線文・縄文・ナデ	+	+	灰褐色	灰褐色	覆
5	+		9.0		無花果形	刷毛ナデ・ヨコナデ	*・石	良好	*	*	研
6	+		9.8			* ・ 瓦拵き	+	不良	灰白色	灰白色	覆
7	+				*	* ・ * ・ * ・ 赤色塗彩	+	+	赤 色	赤 色	覆
8	無蓋	7.6	13.6	5.2	口縁内寄・2孔一対の穿孔 つまみ部に穿孔	* ・ * ・ * ・ 縄文	*・石	+	黄褐色	灰褐色	研
9	蓋						+	+	*	*	覆
10	*						+	+	灰白色	灰白色	覆
11	鉢		14.0		口縁大きく外反	瓦拵き・赤色塗彩	+	+	赤 色	赤 色	覆
12	*		4.4			* ・ * ・ *	+	+	*	*	覆
13	高杯		17.0		口縁内寄	* × *	*〔少〕	良好	*	*	覆
14	*				脚内寄	* ・ 刷毛ナデ・縄文	*〔+〕	+	+	+	覆
1	台付		13.2		口縁有段で立ち上る	3本歯櫛拵状文・コの字重文・円形貼付文	+	不良	灰褐色	灰褐色	覆
2	*				台部外反	刷毛ナデ	+	+	*	*	覆
3	*		6.8		*		*〔+〕	良好	黄褐色	黄褐色	覆
4	*		8.4		*		+	不良	赤褐色	赤褐色	覆

遺物番号	器種	法 量(cm)		形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調		出 状
		器高	口径					底径	外面	
5	壺		17.8	口縁外反	口縁端部彫刻・6本歯櫛描線状文	小砂(少)	良好	黄褐色	黄褐色	覆
6	壺		14.0	* 端部面取り	8本歯櫛描線状文・垂横文・ヨコナデ	小 砂	不良	黒灰色	*	
7	*		7.2	上げ底	指おさえ・ナデ	*	*	黄褐色	*	
8	*		9.0	底部張り出し	* * *	*・石	*	赤褐色	赤褐色	
9	*		6.6	*	ナデ	*	良好	灰褐色	灰褐色	

第2号住居址 (13区)

1	壺		30.0	無花果形		小 砂	不良	灰褐色	灰褐色	周
2	*		13.0			* 石	良好	黄褐色	黄褐色	付
3	蓋	6.7	20.2	口縁大きく外反	指おさえ・ナデ	*	不良	灰褐色	灰褐色	周
4	*	6.5	20.0	* 直に外開・つまみ部穿孔	* * * 刷毛ナデ	*	*	黄褐色	黄褐色	
5	壺		6.6	無花果形	ナデ・赤色塗彩	*	*	赤 色	赤 色	付
6	台付壺		9.0	台部外反		*	*	黒褐色	黒褐色	周
7	*		6.2	* 端部で内弯		*	*	*	*	
8	壺	25.2	19.0	移形・体部上半に最大径	刷毛ナデ・指おさえ・8本歯櫛描線状文・垂横文	*	*	茶褐色	茶褐色	

第3号住居址 (第16区)

5	杯		13.6	5.6	体部やや内弯	ワッロ成形・回転糸切り	小砂(少)	不良	灰白色	灰白色	覆
6	*			9.0		回転瓦ケズリ・付高台	*	良好	青灰色	青灰色	

土域1 (第17区)

1	壺		16.0		朝顔状口縁・端部面取り	ナデ・荒描直線文・刻み・磨き	小砂・石	良好	灰褐色	灰褐色	覆
---	---	--	------	--	-------------	----------------	------	----	-----	-----	---

遺物番号	器種	法 量(cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調		出 状
		器高	口径	底径					外 面	内 面	
遺構外出土土器 (第23・27図)											
1	壺		18.0		翼状口縁・端部面取り	刷毛ナデ・荒縁垂山形文・縄文	小 砂	不良	黒褐色	黒褐色	包
2	*					荒磨き・ナデ・ * - *	+(少)	良好	灰褐色	灰褐色	-
3	鉢	7.8	20.6	6.2	口縁大きく外反・山形突起	赤色塗彩	+(*)	不良	赤 色	赤 色	-
4	台付壺			5.6	台部外反	ナデ	*	*	黄褐色	黄褐色	-
1	杯			5.8	楕形	ロクロ成形	+	+	灰白色	灰白色	-
2	*			6.8	付高台	* ・黒色地埋・付高台	*	良好	黄褐色	黒 色	-
3	壺		12.2		口縁肥厚しやや内寄	*	+(少)	+	赤褐色	赤褐色	-
4	壺				瓶子形	* ・外面施釉	+(*)	*	灰白色	灰白色	-
5	杯		7.5		付高台	* ・内外面施釉	*	*	*	*	-



調査地遠景



分布調査地（東より）

第二圖版
分布調査・土層序



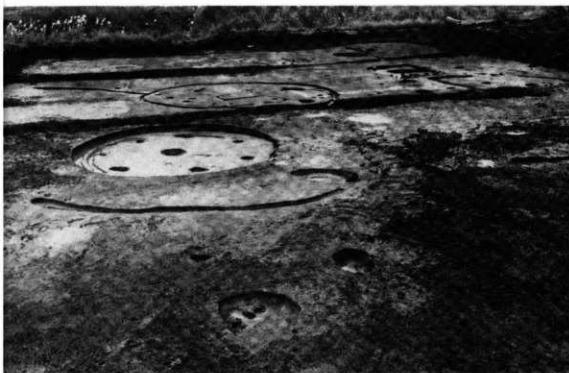
分布調査地（北東より）



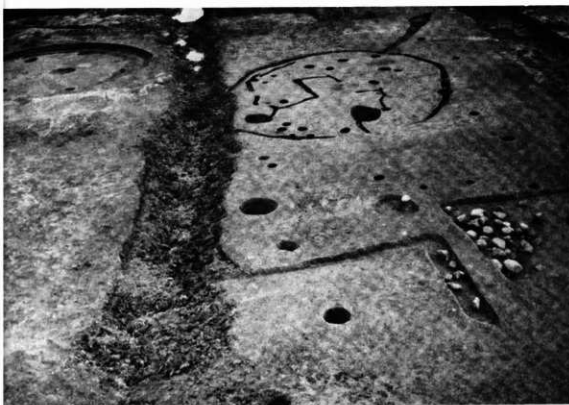
分布調査



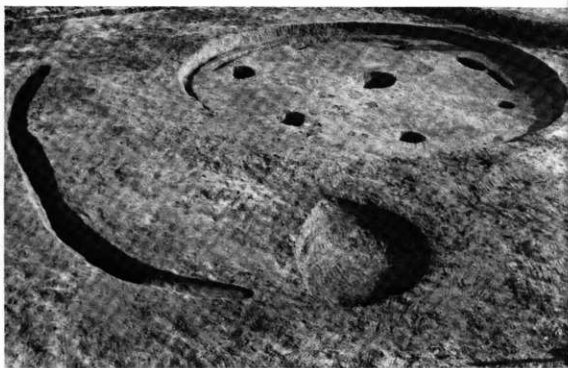
土層序



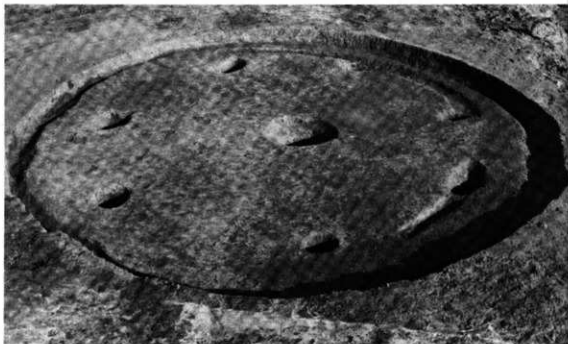
(北より)



(西より)



第1号住居址・溝址1・土壇3



第1号住居址